

林徳寺だより 第八号

# 無量壽

平成17年1月1日  
浄土真宗 本願寺派  
林徳寺 発行  
025 - 276 - 3456

## 浄土真宗物語⑤

第7号に「関東二十四輩」を紹介しましたが、このように、親鸞聖人のお弟子は関東各地に広がりました。

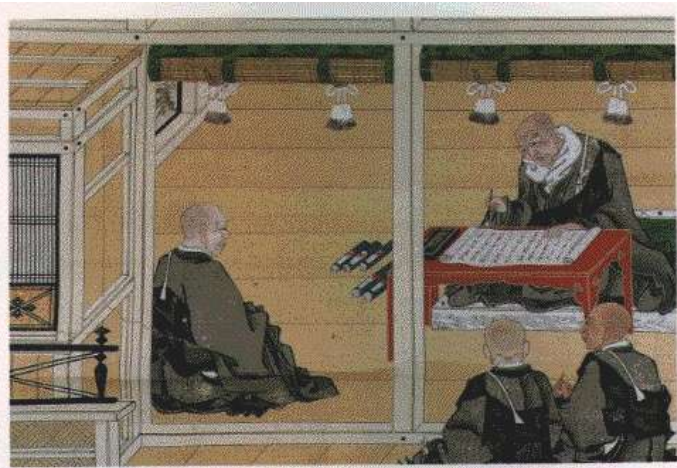
この多くのお弟子達は、毎月二十五日の法然上人のご命日にそれぞれが寄り合つて、仏法を聞き、念仏を喜び合つていたといえます。

聖人は、このように人々に教えを伝えられながら、同時に大切な教えをまとめた本を書いておられました。これが浄土真宗の根本聖典(本典といえます)である『**教行信証**』六巻です。

この本は、法然上人の十二回忌にあたる**元仁元(一二二四年)**、聖人が五十二歳の時に書かれたとされています。場所は稲田の草庵(現在の茨城県笠間市稲田・西念寺)でありました。

現在は、この『**教行信証**』が完成した年をもって浄土真宗という宗が発足した(**立教開宗**とい

ます)年と考えています。また、**稲田の西念寺(平成十四年五月に、林徳寺の団体参拝で参拝・宿泊しました)**は、浄土真宗発祥の地として別格本山と言われています。



教行信証の御完成

真宗木辺派本山 錦織寺 寺伝

また、聖人が関東におられる頃の出来事として、一切経(仏教の全経典)の校合(照らし合わせ)に加わったといわれています。これは鎌倉幕府の依頼によるものであります。ある時仕事ですんで、食事が出されました。魚鳥もふんだんに出されています。ほかの僧侶たちは、そのころの慣例どおり、袈裟をぬいで魚鳥

をたべました。袈裟をぬいでいる間は俗人にかえるというわけです。

しかし、**聖人は袈裟をぬぎませんでした。それを不審に思ったのが、好奇心につられてこの席に来ていた開寿(後の執権、北条泰時の幼名)でした。開寿はその理由を聖人にしつこく聞きましたが、聖人は初めお答えになりませんでした。しかしあまり開寿が問いつめるのでついにお答えになったのは、「せめて袈裟を着て食べて、魚鳥に功德を与えたいと思ったのです。」**ということでした。これは聖人が六十一歳の頃のことといわれています。

(続く)



一切経の校合を行う親鸞  
(真宗仏光寺派本山 仏光寺蔵  
『善信聖人親鸞伝絵』)

## 『京都・本山参拝と紅葉の名勝を訪ねて』の報告

平成16年11月17日(水)～19日(金)の2泊3日で、林徳寺・林徳寺誠心会共催の団体参拝を実施いたしました。約40名の方に参加頂き紅葉の京都を散策する旅でしたが、お陰様で無事に終了いたしました。その様子を報告いたします。

11月17日 新潟空港→伊丹空港→詩仙堂→永観堂→高台寺→京都東急ホテル



11月18日 本山晨朝参拝→高尾：神護寺→丹山酒造→湯の花温泉



11月19日 ホテル→保津川下り→嵐山→東福寺→伊丹空港→新潟空港



### 日本語になった仏教の言葉 ⑧

#### 《機嫌》

我々は日常「機嫌をとる」とか、「機嫌を直す」とか、この機嫌という言葉をよく用います。この機嫌は、仏教語の「譏嫌」が転化した言葉です。仏教の戒律には、性重戒と譏嫌戒の二種類があります。性重戒はその戒律を犯すと罪悪となるものですが、譏嫌戒は本来の罪悪ではないが、その戒律を犯すと世間の譏嫌を受けるといいます。多くの金品を貯えたり、美食をむさぼるようなことをいいます。

誰しもこの譏嫌(譏り嫌)を受けることは不快であり、これを受けないことは気持ちの良いことであるから、人の気持ちを表す言葉としてこの言葉が通用するようになったのでしよう。

我々の世界は譏嫌の多い世界ですが、その中であつて真に機嫌良く生きて行く道は念仏無碍の一道を進む以外にないのでしよう。

『私たちの言葉』 経谷芳隆より